

# 幼年期の子どもの自然との関わり ～生きものふれあい学習の事例と課題の分析～

斉藤 千映美\*

Pre-School Children's Experience of "Nature": Practices Using Domestic Animals  
as Teaching Tools

Chiemi SAITO

要旨：幼年期の子どもの自然との関わりを保障する目的で、飼育動物を活用した受動的な遊びと、時間配分にもとづくふれあい学習プログラムを施行した。受動的な遊び活動では少数の幼児が教材への深い愛着を示した一方で、多くの幼児は興味関心を長時間維持しなかった。学習プログラムでは多くの幼児が教材への平均的な関心を維持することができたと考えられた。

キーワード：生きもの、環境教育、ふれあい、自然、生命尊重

## 研究の背景

人間と他の生き物との大きな違いの一つは、人間が過去の歴史を振り返り、そこから学ぶ智慧を持つていることであろう。また同様に、人類の智慧は科学技術の発展をもたらし、それらによって人の生活は時代とともに充実し、よりよく生きることが可能になって来たはずである。

しかし現実には、ゆとりある時間の創出は困難になる一方である。一世紀・半世紀前には当たり前であったような、子どもたちが生活の中で自然と出会う場所や機会は、日本には殆ど残っていない(五島, 2013)。成長の過程で感情をゆさぶられるような生命に関わる体験的な学びの機会を得ることは難しい。

適切な自然との関わりは、人間が持続可能な社会を構築するための態度や物の見方を形成する上で、必要不可欠なものであると考えられる。日本の学校教育においても「自然との関わり・生命尊重」は、育みたい資質・能力の1つとされ(文部科学省, 2017)、幼稚園教育要領ではこの力は次のように説明されている。

自然に触れて感動する体験を通して、自然の

変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にす気持ちを持って関わるようになる。

出典：文部科学省 幼稚園教育要領(平成29年告示)

この目標を達成するための保育の領域「環境」の保育内容には、「身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする」という項目がある。その内容は、文部科学省(2018)において次のように説明される。

親しみやすい動植物に触れる機会をもたせるとともに、教師など周囲の人々が世話をする姿に接することを通して、次第に身近な動植物に親しみを持って接するようにし、実際に世話をすることによって、いたわったり、大切にしたりしようと

\* 宮城教育大学教員キャリア研究機構 環境教育・情報システム研究領域

する気持ちを育てることが大切である。

園内で生活を共にした動植物は、幼児にとって特別な意味をもっている。例えば、小動物と一緒に遊んだり、餌を与えたり、草花を育てたりする体験を通して、生きている物への温かな感情が芽生え、生命を大切にしようとする心が育つ。生命の誕生や終わりといったことに遭遇することも、幼児の心をより豊かに育てる意味で大切な機会となる。幼児期にこのような生命の営み、不思議さを体験することは重要である。(後略)

出典：文部科学省 幼稚園教育要領解説(平成30年)

このように、幼児にとっての生きものとの関わりは、親しみながら接し、大切にすることを育て、生命の営みや不思議さを体験することによって心を豊かに育てる活動である。

人間が飼育する動物は、生きものと幼児の関わりを保障しうる教材の一つであり、飼育作業への関わりやふれあいを中心とする学習が推奨されている(日本初等理科教育研究会, 2006)。筆者は、2010年より家畜動物を中心とする動物を用いて、動物飼育やふれあい活動による学習を実施している(斉藤, 2016)。本稿では、その中で、幼児を対象として、遊びの中でヤギ・ウサギとのふれあい活動を行った。またその考察を踏まえて、幼児教育におけるふれあい活動のプログラムについて考察する。

### 遊びの一環としてのヤギふれあい活動

2015年6月～7月、宮城教育大学附属幼稚園で、3回にわたり遊びの一環としてヤギとのふれあい体験を提供した。

園児が園庭で遊んでいる時間に、ヤギと餌植物(アオキの葉)を園庭に持ち込み、ヤギを杭で係留し、やってくる園児のふれあいと餌やりを支援した。支援のために、ヤギ1頭につき2名の補助員がついていた。

幼稚園側が子供達の自発的な遊びを観察したいという方針であったため、教諭も支援者も、ふれあいのためにあえて園児を集めたり、指導を行ったりはしなかった。ただし園児の安全確保のため、自発的にヤギを見に集まってきた園児に対しては、「守ってほしい

約束」を伝えることにした。園側の方針に則り、なるべく園児一人一人の自発的な行動(遊び)を阻害しないよう務めた。ただし、園児とヤギの安全を保障する必要があることから、「一度に大勢で餌をやらせない」「動物のそばで大きな声を出させない」「有毒な植物を食べさせない」など、支援者はいくつかの点で活動中注意を払う必要があった。

一回の活動は30分程度であった。3日間とも、ヤギがやってくると最初に多くの園児たちがヤギを取り囲み、興味津々であった(写真1)。最初に多くの園児がヤギを観察し、ヤギに触れ、名前を呼び話し合ったりしていた(写真2)。その後、ヤギが草を食べているのを見た園児があちこちから植物を持ってきたり、支援者が用意してきた餌植物を与えたりした。餌やりは園児にとって魅力があるようで、何度も何度もアオキの葉をもらいにきては一枚ずつヤギにあげる園児がいた。

活動の流れは3回とも、ほぼ同じであった。観察やふれあいの後で餌やりを1、2度経験すると、園児は



写真1 幼稚園でのふれあい開始時(1回目, 2015年6月)



写真2 動物に触れる子どもたち(1回目, 2015年6月)

少しずつ他のところ（他の遊び）に行ってしまうようになり、子どもの数が減っていく。入れ替わり立ち替わり、必ず幼児がヤギのところにやってきましたが、30分間飽きることなく最後までヤギのところ留まった園児は、1回目は7名、2回目は3名、3回目は2名だった。これらのべ12名の中には、餌をあげるとヤギがあつという間に食べてしまうことに驚き喜んで、ヤギの食べるスピードには全くお構いなしに、機械にコインを入れるように葉っぱをヤギの口に運び続ける園児（男児）がいた。結果としてヤギがうまく食べることができず、落とした葉っぱが地面に散らかり、支援者のほうが気をむく場面があった。一方で、ヤギを観察したり、名前を呼んだり、繰り返して触ったり、ヤギについて支援者に質問をしたり、自分の話（動物を見た話から始まって、自分の家族の話、遊びの話など脈絡なく続いていく）をしたりしながら、ヤギから離れようとする園児（女児2名）もいた。

3日間の活動で幼児から自発的に聞かれた発語は次のようなものであった。

感想：「かわいい」「きれい」「すごい」「びっくりした」「ちょっとこわい」

疑問：「ご飯あげていい？」「どこに住んでいるの？」

観察：「大きい（小さい）」「食べるのが早い」「食べる時に音がする」「今鳴いた」「うんちした」「毛が固いね（柔らかいね）」

関連する記憶：「動物園でヤギをさわった」「犬をさわったことがある」「うちの犬も鳴く」

この事例において、支援者は基本的には安全管理に徹し、園児からの働きかけに応じて答える活動を行なったのみであった。園児の中にはヤギが怖いと感じるものも当然あったであろうし、そのための対策としてヤギは常に保定し行動を制限した。ヤギのストレスを軽減するため、園児の行動に注意を与えることもあった（例えば、ヤギは直近で大声をあげて騒いだり、目の前にある餌を食べさせてもらえなかったりすれば嫌がるのが普通である）。園児が取り回しをすることでヤギに振り回される懸念もあり、リードを持たせる

こともしなかった。「ヤギに乗りたい」「一緒に向こうのほうに行きたい」という声が聞かれたが、ヤギは動かさなかった。子どものヤギふれあい活動は「（五感を活用して）観察する」「餌をあげる」「支援者との間で交流をする」に絞られた。安全管理上、園児の自由な遊びの中にヤギを組み入れることはできず、単調なふれあいによって大半の園児が短時間で関心を失っていると考えられた。

幼稚園の教諭からは、「多くの子どもたちが興味しんしんでした」「普段はおとなしく、自己主張をできないA子ちゃんが、ヤギがくると生き生きして見たことのない表情を見せてくれます。びっくりしました」などの言葉を頂いた。しかし「一人一人好きなことができる」ことが保障される園庭での遊びの時間の中で、繋がれた動物への関心が一時的でうつろいやすいことは明らかであった。その一方で、幼児の遊びの場での活動であるため、ヤギの首輪を抑えなければならない場面も多く、ヤギにとってはストレスのかかる時間帯であったと考えられる。

この時の経験から、筆者は、幼児の動物ふれあい学習は、支援者が明確にプログラム化することが好ましいと考えた。時間を区切って活動することは、幼児自身の発達段階に即しているだけでなく、ふれあいに使用する動物の安全や福祉といった観点から好ましいことである。また、自由に触れ合うのではなく、支援者側が目的意識を明確に持ち、それに沿って活動を提供することも、限られた時間の中で幼児の自覚的な気づきを得るために重要である。具体的には、幼児の自発的な活動を見守るのではなく、（1）ふれあいの前後に目標の確認とふりかえりを行うこと、（2）観察の際に集中力を高められるような声かけや誘導を支援者側から行うこと、（3）意図的に気づきを交流する時間をもうけ、互い同士の表現をうながすこと、が、ふれあい活動を学習プログラムとして成立させるための条件であると考えた。

これらの支援によって、園児に対する禁忌事項の伝達や安全管理に関わる行動制限を実際のふれあい時間中に繰り返す行が必要なくなり、また一過性で短時間のふれあいから最大限の学習効果を得られると考えた。

## 学習活動としてのふれあい

「杜々かんきょうレスキュー隊」は、自然環境・社会環境を素材に、仙台市の環境NPOなどが環境学習プログラムを作成し、提供する事業である。筆者らはこの事業の一環として、「集まれ！地球の仲間たち！～動物から学ぶいのちのつながり～」のタイトルで、動物とのふれあいを含む学習プログラムの提供を2017年度から行っている。

この事業では、生き物を教材として活用し、幼稚園から小学校高学年向けまで、3つのプログラムを準備しているが、ここではそのうち、「ふれあい学習プログラム」の実践事例（資料1）について紹介する。

「ふれあい学習プログラム」では、ヤギやウサギとのふれあいを中心とする学習を提供しており、保育所・幼稚園・子ども園を対象とするふれあいは、2017年度と2018年度にはそれぞれ5回ずつ行なった。

プログラムはヤギを飼育している大学の教材園で実施することもできるが、大半の学校園は出前型の学習を希望した。ふれあい学習を行う場合の流れは、附属幼稚園でのふれあいを元に、次のように設定した。

### ① 事前学習の実施

出前授業の前には事前の打ち合わせを指導者側と園の担当者の間で行い、ふれあい活動の前に園で事前学習をしてほしいことや、その内容（動物について興味関心を持ってほしいこと、どんな生き物が想像してほしいこと）を伝えた。動物の糞に対する園児の反応が大きいことから、動物の糞を題材とする絵本を読むことなどの活動も紹介した。

### ② ふれあいの場所の設定

事前の打ち合わせの際に場所を決めておき、当日は園庭の支柱（鉄棒の支柱など）にヤギを2頭（場合により1頭）を繋いだ。ウサギをケージに入れて持ち込み、半日陰の台の上にケージを設置した。動物1頭あたりに、学生が2名ずつ補助員としてつくようにした。

### ③ 学習開始前の確認

授業者は教室に入り、自己紹介の後、活動の目標「動物となかよしになろう」を確認し、餌のあげ方の練習をした。また園児と活動に際しての約束（動物にやさしくすること、動物のお世話をしているお兄さん、お姉さんのお話をちゃんと聞くこと）とを伝えた。

### ④ グループごとの短時間のふれあい

活動はおよそ10分を1区切りとして行い、1グループ5～10名の園児が、特定のヤギ個体あるいはウサギのところへ行き、支援者からその個体の名前を覚えてもらったあと、観察・ふれあい・餌やりなどを行う。10分ほど経ったところで、授業者が声をかけ、グループ単位で次の動物のところに移動する。このようにして、ヤギ1または2頭とウサギ1羽とのふれあいを行った。

### ⑤ 声かけによる表現の支援

ふれあいに際しては、動物をしっかりと観察し、触れたり餌をやったりする、という活動を行なった。その際、支援者（学生）は、「ヤギさん、なんて言ってると思う？」「どうしたらよろこんでくれるかな？」などの声かけを行い、子どもたちからの「ドキドキしているんじゃない」「きもちいい、っていつてるよ」など子どもからの表現を引き出すように努めた。また、動物に触れたときには、「おでことおなか、おなじだった？違う？」「違うー！」「どこが違ったの？」「おでこが石みたい」「石みたい？が石みたいなのかな？教えて、・・・本当だ！ここ、なんだか石みたいだね？・・・みんな、〇〇くんがすごいことに気がついたよ！」・・・など、比較の観点を導入しながら子どもの気づきを引き出し、さらに気づきの自覚化を支援した。観察したことを豊かに表現する言葉が発せられた時はグループ内で共有し、それによって園児らが、さらに積極的に動物を観察するよう、促した。活動の中間と最後の合計2回は、授業者の周りに子どもたちを全員集め、その日発見したことについて全体で共有した。



写真3 ウサギとのふれあい(2018年)



写真4 ヤギ(1才)は最初は少し怖い



写真5 ヤギ(0才)を怖がる幼児は少ない

### ふれあい学習活動の工夫

2017-18年の活動では、子供たちの活動の質を高めるための次の工夫を行っていた(資料1参照)。

#### (1) ふれあいの時間の集中を高めるための工夫：

ふれあいのの前に目標「動物となかよくなるには、どうしたらよいか」を園児と確認し、また注意事項を伝えた。餌のあげかたを事前に全員で練習することで、ふれあい時に補助者に余裕が生まれるようにした。観察の際の観点を増やすため、また子供達の関心がそれていくのを防ぐために、ヤギ、ウサギを複数個体持ち込み「大きいヤギと子ヤギ」「ヤギとウサギ」の違いを子どもたちが意識できるように、それぞれの個体ごとにふれあいの時間をとるようにした。活動の開始時と終了時には目標を達成できたかどうか、考えたこと

やわかったことがあるか、授業者が確認する流れができた。

#### (2) 観察の際に集中力を高められる声かけ：

支援者(この場合は学生たち)による子どもたちへの声かけが「観察を支援するため」であることを、支援者側が認識できるよう、資料2を作成し、事前に支援者全員で共有した。また支援者は、ふだんから動物の飼育を担当しているため、安全なふれあいを確保することができるだけでなく、子供達の気づきや疑問に応じて「尻尾を振っているのは、元気がよくて嬉しいときなんだよ」「うさぎさん、ちょっとびっくりしているのかな」など、言葉のない動物に代わって、子どもの理解を支援したり、大きな誤りがあったときに訂正する役割を果たした。

#### (3) 伝え合う活動による学びの発展：

ふれあいの途中で、授業者が中心となって、子どもたちを集め、輪になって「わかったこと」を聞きあう活動を行なった。この時間は、子供たちの活動にメリハリをつけ、一度気分転換することで再度集中力を高めやすいようにすることが大きな目的であった。また、この時間を設けることによって、「友だちが発見したことを自分で確かめたい」「友だちに見せたい」という欲求が生まれ、最後のふりかえりでは多くの子どもが「ヤギ(ウサギ)は、〇〇をしたらよろこんでくれる」と発言する活動になった。

支援者の支援のもとで幼児の表現は多様に広がり、例えば次のようなものが含まれた。

動物の気持ち：「なでると喜ぶ」「お腹には触られたくない」「嬉しい時に尻尾を振った」「ごはんが欲しくて舌でべろべろした」「お腹がいっぱいになったら後ろに下がってしまった」「ごはんをあげたら喜んでいた」「おねえさんが触ると安心してた」

動物の観察：「ウサギはずっと鼻をヒクヒクさせている」「ウサギの方が毛が柔らかい」「子ヤギは柔らかいがおとなは固い」「蹄は固い」「落ちた葉っぱを食べない」「葉っぱを奥歯で噛む」「噛むときに大きな音がしている」「耳は薄くてピンク色で温かい」

## 学習活動後のアンケートから

学習プログラム終了後には、保育所・幼稚園側の担当教諭へのアンケート調査(設問に対する自由記述式)が行われた。そのうち、園児の反応、講師(支援者)の教え方、学習内容を今後の生活に生かすことができる点について、回答の一部を抜粋する。

### (園児の反応や理解度について)

- ・ 学生さんの「なぜ？」の質問に一生懸命考えたり、気づいたことを言葉にしたりしており、反応はとても良かったです。
- ・ 間近で見る機会の少ない動物に緊張する子いましたが、徐々に慣れて楽しむことができました。動物に対して優しく関わることを意識してふれあうことができていると思います。
- ・ 「フワフワしている」「ヤギよりもウサギのほうがやらかい」「ヤギのおかあさん食べるの速い」「かわいい」と、ふれあい体験を通してたくさんの気づきや感動があったようでした。
- ・ 実施の前に絵本をお借りして見ていたことで、動物への興味・関心が増し、とても良かった。実際にふれあいになると最初は怖がったりする姿があったが、時間が経つにつれ愛着心が上回り、ヤギやウサギのことが大好きになっていく様子を間近で感じる事ができた。

### (講師の教え方について)

- ・ わかりやすい説明で子どもたちも理解できていた。
- ・ はじめの説明に絵や図を用いて説明すると、理解しやすくなると思います。
- ・ 約束事の確認回数が多かったです。説明の時と、実際に触れ合う直前に1度でもよいと感じました。
- ・ どの方もみなさん優しくわかりやすく教えてくださいました。餌の持ち方も、全員で実際にやってみただけでしっかりと理解することができました。ふれあいの最中も、どの部分を触っているか、どのようにしたらいけないかなど、その都度教えてくださっていたので、私たち保育士も安心して補助につくことができました。

### (今後の生活にどう活かせるか)

- ・ 動物との出会いやふれあいをきっかけに生き物への興味が深まったり、命の尊さに気づくことなどにつながると考えられます。
- ・ 動物と友だちになれたように、初めて会う人とも同じように優しく関わりとすぐに友達になれるよ、と話してくださった言葉が、自分以外のものとの関わりを伝えるのにわかりやすくて良いと感じました。
- ・ 動物にも命があり、その命を大切にすることや優しく関わることなど、本物に触れることで子どもたちなりに感じたことは大きかったと思います。普段なかなか触れ合う機会がないぶん、良い学びになりました。
- ・ 動物と触れ合うことができたならきっと楽しいだろうなという思いがありましたが、今回のふれあい体験は想像していた以上の楽しさがありました。・・・今まで動物の絵本や紙芝居を見せたり、写真を見せたこともありましたが、実際の体験は感動が全然違うなと感じました。

これらの感想からは、当初の計画で想定していた、目的(動物と仲良くなる方法を考える)に合わせて支援者が支援し、子どもたちも考えながら集中力を切らさずに活動した様子が伺える。

一方で、アンケートには記載されなかったものの、現場で聞き取った保育士1名の意見として、「グループで決められた時間ふれあうのではなく、個人個人が好きなように好きなものに関わった方が良いのではないか」というものがあった。この意見は、筆者が先に実施した「遊びの中のふれあい」とほぼ同様のイメージで語られていたと思われる。

## 幼児教育におけるふれあい学習活動の意義

幼児期の生き物とのふれあいは、生活や遊びの中で実現されることが望ましい。しかし園庭の自然は限られている。ふれあいの対象となるのは身近な昆虫や小型動物(オタマジャクシやカタツムリなど)、あるいは飼育しているウサギなどである。飼育動物がいない幼稚園・保育所では、動物園や牧場に行くなど、限ら

れた機会にふれあい体験を実施することも多く、それは日常生活とは大きく異なる貴重な機会となる。筆者は、遊び中心の自由なふれあい活動と、支援者により計画されたプログラムとしてのふれあい活動の双方を実施した。「遊び」を中心とする日常の保育活動では、教材は日常生活の中に見出せるものであることが望ましいと考える。その上で、日常の遊びと短時間の集中が求められる場面を共に作り出し、組み合わせることにより、それぞれの教材の持つ意味はさらに深められていくのではないかと考えている。

たった1回のふれあいで子どもたちの人生が変わることもなければ、見方考え方が変わることはない。しかし、幼年期の子どもたちにとっては、直接的に人間と近い生きものと関わる体験は深く心に刻まれうるものではないか。観察することの楽しさや、生命について得た気づきなどが、楽しい思い出の一環として子どもたちの心に残り、日常の生活の中での気づきにつながるかもしれないのである。

筆者はかつて内モンゴルの牧畜民の家庭で、ヤギの屠畜と解体、調理、食べるころまでを取材した。庭先で屠畜されたヤギの血は一滴も無駄にすることなくバケツに貯められ、ソーセージの材料になった。内蔵は余すことなく利用され、腸内の食物残渣ですら豚や鶏の餌になった。とことんまで、命を大切にしているのである。印象的であったのは、一家の幼い子供達が、解体されていくヤギから1～2mほどの位置で、積み木や車のおもちゃを使って無心に遊んでいる姿であった。12歳の娘は肅々とソーセージの腸詰を手伝った。牧畜民の子供達は、このようにして家畜動物の（あるいは食べ物の）価値や、生き物と自分との関係を身体的に経験している。

翻って、日本の子どもたちは真剣に命の価値や意味に触れる機会を持ちにくい。幼児にとって動物は、第一に好奇心の対象である。幼児向けの絵本には多種多様な動物が登場し、人と一緒に暮らしたり、話したり、人に代わって大活躍したりする。幼児の早期に表出される語彙の一つは「ワンワン」である（小椋, 2007）。子供にとっては、多様な動物のいるにぎやかな世界への好奇心は本能的なものであると言えよう。しかし、

好奇心の先に出会うべき自然が、子どもの成長の過程において限られていることが問題である。

生き物は、子どもにとって自然との関わりを実体化してくれる教材である。本物の動物は、かわいいが、それだけではなく、「怖い」「臭い」かもしれない。人間とよく似ているところも、理解できないところもある。人間にとって資源となることも、有害となることもある。生き物を知ることは自分について知ることなのである。動物に触れるときに生じる様々な感情を反芻し、それによって「人間が自然の一部である」ことを理解するその第一歩に、動物ふれあい学習の究極の意義がある。

ふれあい学習の実施方法にはまだまだ多くの改善すべき点がある。改善を通じて、ふれあいが単なる活動ではなく、学びにどのように結びついていくのか、さらに明らかにしていきたい。

## 謝辞

動物の飼育とふれあい学習の実施時、宮城教育大学自然フィールドワーク研究会YAMOIの学生に多くの支援をいただきました。また学習の実施にあたりご配慮・ご支援を頂きました宮城教育大学附属幼稚園、仙台市環境局環境共生課、Feel せんだい、杜々かんきょうレスキュー隊事業実施の対象となった幼稚園・保育所の皆様に深く感謝します。

## 参考文献

- 五島政一 2013. 「生きる力」を育成するための自然体験活動を重視した環境教育に関する一考察. 国立教育政策研究所紀要, 142,227-242.
- 文部科学省 2017. 小学校学習指導要領（平成29年告示）. 東洋館出版社.
- 文部科学省 2018. 幼稚園教育要領解説. フレーベル館.
- 日本初等理科教育研究会 2006. 学校における望ましい動物飼育のあり方. 文部科学省.
- 小椋たみ子 2007. 日本の子どもの初期の語彙発達. 言語研究 132, 29-53.
- 斉藤 千映美 2016. 主体的な学習教材としての学校飼育動物. 宮城教育大学環境教育研究紀要, 18, 11-18.

杜々かんきょうレスキュー隊  
集まれ！地球の仲間たち！～動物から学ぶいのちのつながり～  
「どうぶつとなかよし」

目標

**目標1** 生き物を意欲的に正しく観察することができる。（観察）

**目標2** 観察を通じて気づきをを自覚し、それを周りの人と伝え合うことができる。（思考、表現）

**目標3** 活動を通じて、生き物への親しみ、興味関心を養いこれからの生活への意欲を養う（共感、学びに向かう力）

時刻	活動	指導上の注意点
00:00 【教室】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつ（T1）</li> <li>・やぎさんと仲良くなるには</li> <li>・やぎさんにごはんををあげる練習をしよう</li> <li>・約束</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己紹介</li> <li>・「今日は、どうぶつと仲良くなりましょう」</li> <li>・「どうしたら、仲良くなれるかな？」（考えさせる）</li> <li>「なまえをよんであげる」</li> <li>「なでてあげる」（どこをなでればいいかな？）</li> <li>「ごはんをあげる」（どうやってあげればいいかな？）</li> <li>・いろいろな意見がでました。どうぶつに会いに行き、おにいさんおねえさんといっしょに確かめてみましょう。</li> <li>・一人一人にアオキを配布する</li> <li>・グーの手</li> <li>・「お兄さん、お姉さんのお話をよくききましょう」</li> <li>約束が終わったら先生に引き継ぐ。</li> </ul>
00:12 【外】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これからの活動の説明</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>（手を洗って外に出て整列まで先生にお願いする）</li> </ul>
00:15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ふれあい1回目(10分)</li> <li>・休憩1回目(5分)</li> <li>・ふれあい2回目(10分)</li> <li>・休憩2回目(5分)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ふれあい時の支援（後述）</li> <li>T1: 休憩1回目にふりかえり</li> </ul>
00:45	<ul style="list-style-type: none"> <li>振り返り（T1）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「みんな、やぎさんと仲良くなれたかな」</li> <li>「やぎとうさぎ、どんなところに気づいたかな」</li> <li>・気づきを自覚させ、友達の発見から新たに気づくを深める</li> <li>「飼っているどうぶつには、やさしくしてあげよう」</li> </ul>
00:50	<ul style="list-style-type: none"> <li>さよならをしよう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・さいごに、仲良くなったどうぶつに、もういちど会いに行こう</li> </ul>



ふれあい時の支援者の行動

1 動物とこどもの安心・安全を確保する。

- ・子どもが動物を圧迫したり、興奮しすぎないようにする。なぜそれが必要かを、動物の目線から伝える。  
(例、「指も食べものかなーって、間違えて噛んでしまうかもしれないよ」「うさぎさんは耳がよく聞こえるから、大きい声をだすとびっくりするんだね」)
- ・ヤギが園内の植物やビニールなど食べないように注意

2 下記の順序で、子供の気づきや表現を促す。

2-1 観察のきっかけをつくる

- ・動物の自己紹介(なまえ、年齢紹介)をする。
- ・子供にやさしく話しかけ、興味関心を継続できるようガイドする。

2-2 観察を深められるような声かけ

- ・離れたところから見る、近づいてみる、餌をやる、触れる、の経過に従い発見が増えて行く。
- ・観察を励ます(「次はここをさわられるかな」「あれ、ほんとだ、おにいさんも気づかなかったよ。」「もきちくん、なんて言ってるかな」など)。
- ・食べる様子や排泄は、気づいた瞬間に子供達に伝える(見逃しやすい)
- ・子供の発言を深める問いかけ(例、「けっこう大きい」→「うさぎさんとやぎさん、どっちがおおきいかな」など)。
- ・自分の観察や考え(「かわいいね」とか「小さいね」など)は慎む。
- ・子どもの感じ方は自由。ただし明らかに誤った観察(「牙がある」「ヤギは目がみえないんだよ」みたいな)については、改めて観察を促す。

2-3 子供に発見してほしいこと：

- ・「**どうするとやぎさん(うさぎさん)と仲良くなれるのか**」: やさしく話してあげる。なまえをよんであげる。大好きなごはんをあげる。大きな声をださない(うさぎさんは耳が大きいから、小さな音も大きく聞こえてしまう)。ただかない。なでてあげる(つくしはご機嫌しい)。動物は喜んでいる時にどんな行動を示すか。怖がっている時はどうか。
- ・身体の特徴:(例)排泄、毛、体の形や硬さ、温度。好きな食べ物や、食べ方。ヤギの歯、蹄、尻尾、うさぎのヒゲ、耳、足の裏、鼻。うさぎとやぎの違いなど。。。。。
- ・質問がなければ知識は与えなくても良い。ただし、安全上必要な事項(動物の取り扱いなど)については、質問されなくても適切な知識を与える。

2-4 メッセージ

「優しい声でお話ししてくれてありがとう」「おともだちがたくさんいるから、ちょっと怖いんだ。」のように、動物の代弁者として動物の気持ちや話をしてあげる。それによって、「ヤギもウサギも一生懸命生きてるけど、お話できないから、人が守ってあげなければならぬんだ」ということが伝わります。

